

## 女のように

登場人物

川崎まりあ

小川浩子

岡星みや子

平野雪雄

新山光彦

酒井英行

工藤先輩

小柴先輩

県立美術館の男

その他、福島市民

1

繁華街。

「福島コント劇場」のあるビルと、隣接する教会との間に、女が立っている。川崎まりあ。

彼女は、劇場の窓越しに聞こえる声に反応し、笑っている。

やがて、5人の男たちがビルから、出て来る。

平野、新山、酒井の3人とコントサークルの先輩、工藤と小柴

3人は先輩2人に「ありがとうございました」と挨拶し、別れる。

酒井「豚のどこ、やめたほうがいいんじゃないか」

新山「え、なんで。豚やめて、どうする」

酒井「長い。小柴さん、あくびしてた。さぞ、退屈したんだ」

新山「小柴さんはいつも眠いんだよ。というか、マメ柴なんか関係ないだろ」

平野「おい、まだ、いるぞ」

小柴、やや離れて、煙草を吸っている。やがて、去る。

平野「工藤さんは、目が血走ってた」

新山「こわいな」

平野「相変わらず、いいのか悪いのか、さっぱりわからない」

酒井「……コント豚の話って言って、コントはいいからってなるだろ」

二人「うん」

酒井「で、豚の話になって、話、はいいから、早くはじめろ」

二人「うん」

酒井「で、なんだっけ」

新山「豚、って言うんだおれが」

酒井「そうそう」

新山「で、おまえが、豚だけじゃわけわかんない。……で？」

酒井「ああ、だから、その豚には、流れるにすぐいったほうが。……うん？」

新山「あ、なるほど、そういうことか」

平野、川崎に気づいて。

平野「誰」

酒井「あの人、先週も来てた」

平野「へー」

新山「なにか」

川崎「あ。いや、なんか、つい、そこで、聞き込んでしまいました」

酒井「え、そこで」

川崎「ええ、あの窓のそこ。すみません」

平野「聞こえましたか？」

川崎「ええ。なんか、今日もやってるかなって思ってたら、やってて」

酒井「毎週、やってるんです。今度、ライブがあって」

川崎「そうですか。」

酒井「よかったら」

川崎「はい」

平野、チラシを渡す。

川崎「あ、すみません。でも、ほんと、面白くって。ありがとうございます。……じゃ、さようなら」

川崎、去る。

新山「はは一。豚ってだけ、おれが言うのは、いいな。いきなり、豚っていうのが、唐突でいい。意表を突いている」

酒井「ファンかな」

平野「え、ファン？」

酒井「さっきの人、おれたちのファンかもな」

新山「おいおい、なにを言い出すんだ」

平野「ファンって一人なのか」

酒井「ファンは、一人から始まるんだ」

平野「先週も来てたらしい」

酒井「ファン以外にありえないな」

新山「おい、よしてくれよ」

3人、去りながら。

新山「そもそも、動物コントって題名が、よくないんじゃないのかな」

酒井「平野、おまえナイスな判断だったよ」

平野「なにが」

酒井「ささっと、チラシ、差し出すんだもの」

平野「勝手に手が動いたんだ」

新山「なあ。題名変えよう」

酒井「ライブ来てくれるといいけど」

新山「おいおい」

2

JR 福島駅前の広場。

反核運動の集会。ビラを配る人々。

その中にまぎれこんで、小さな女党の集まりがある。川崎まりあ、小川浩子、岡星みや子。

小川「地球温暖化がすすんでいます」

岡星「みなさんの心がけ次第で、地球の温度を少し冷ますことができます」

小川「小さな女党は、環境にやさしい生活をモットーに活動しています」

岡星「さあ、いまこそ社会冷却、スモールハピネスを合い言葉に、立ち上がりましょう」

川崎「心に打ち水を。ストレスのない現代社会を実現しましょう」

岡星「小さな女党は、すぐ熱くなる男社会を変革し、地球温暖化を食い止めます」

小川「オーストラリアにある世界最大のサンゴ礁、世界遺産にも登録されているグレートバリアリーフで、サンゴの色が白くなる白化現象が全体の 93%に広がっていることが最新の調査で明らかになりました」

岡星「白化はサンゴと共生し光合成を行う微小な海洋植物が海水の温度上昇など異常な環境の変化によって失われることで起きます」

小川「海水温度が下がり、海の植物が戻ってくれば、サンゴは回復します」

岡星「さあ、男の暴力には冷や水を、小さな女の心根の優しさで、世界中のサンゴを救いましょう」

川崎「募金と署名はこちらで受け付けています。よろしくお願ひします。小さな女党です。募金と署名はこちらです」

平野、チラシをもらって、何気に読みながら、川崎のもとで、署名する。

川崎「……あ」

平野「あ、どうも」

川崎「ありがとうございます」

川崎「……あ、手伝ってるっていうか」

平野「へー」

小川「川崎さんの知り合い？」

川崎「え、あ、いや、ま、はい」

平野「……被爆 71 周年原水爆禁止世界大会ですか」

川崎「ああ、いや」

小川「それは、違うから、あっちは社民党系。私たちは、小さな女党です」

岡星「代表の岡星みや子です」

小川「社会冷却、スモールハピネス」

岡星「小さな女の力で、男社会を小さく、まるく、おさめます」

小川「全国の小さい女たちよ、共闘せよ。私は副代表の小川浩子です。この人は党員の川崎です」

平野「川崎まりあ、です」

小川「私も小さな女です。」

岡星「小ささとは、姿形の大きさ、サイズのことではなく、力の問題なのです。小さな力は、意外と強い！」

平野「……」

小川「募金、どうですか。さ、こちらに」

岡星「あなた、お仕事は」

平野「いえ。バイトです」

岡星「企業は、非正規雇用の待遇改善に努力し最低賃金時給1500円を実現せよ」

平野「……」

小川「小さな女党への募金は、ワンコインからでもOK。よろしくね」

平野、募金する。

三人「ありがとうございました」

小川、岡星、演説活動にもどる。

川崎「なんか、大きな集会にまぎれてやってたら、流れで、人が来るっていうか」

平野「ああ。なるほど」

川崎「連絡先も、書いてくださいね」

平野「え」

川崎「今度、よかったら、お茶でもどうですか」

平野「あ、はい」

3

福島駅内。ドトールコーヒー。

川崎、一人飲み物を飲んでいる。

と、平野、新山、酒井、飲み物を抱えて来る。

平野「こんにちは」

川崎「あ、こんにちは」

新山「こんにちは」

酒井「こんにちは」

川崎「川崎といいます」

新山「新山です」

酒井「酒井です」

川崎「すいません、お呼び立てして」

平野「いえ」

川崎「すわりましょうか」

みな、すわる。3人と川崎が向き合う。

平野「……なんか、この二人も来てしまっ」

二人「すいません」

川崎「いえ、そんな」

平野「……おまえ、そっち、行ったら」

新山「え、ああ」

新山、川崎の隣に移動する。

川崎「……このあいだは、なんか、盗み聞きみたいになってしまっ、ごめんなさい」

新山「ああ、いや、そんな、大丈夫ですよ」

酒井「なんか、おれたちも、嬉しかったんです。思わぬお客さんがいてくれたっていうか」

川崎「耳だけで聞いていると、頭の中にイメージが浮かぶんです。みなさんの姿かたちが見えない分、想像力がはたらいて、よかったです」

3人「……」

川崎「……、もちろん、動きも見えたら、もっと面白いと思いますよ」

4人、それぞれ、飲み物を飲む。

川崎「いつも、あそこで練習していらっしゃるんですか」

平野「はい」

川崎「今度、ライブがあるんですよね」

平野「はい。……先輩のコントの前座です。私たちにとっては初めてのステージなので、ちょっと緊張してるんですよ」

川崎「私も、観に行っていていいですか」

平野「ええ。もちろんですよ、なあ」

酒井「ええ。ぜひぜひ」

新山「ありがとうございます」

川崎「わー。たのしみ」

川崎「それで、私、みなさんにご相談があっ」

平野「なんですか」

川崎「……私は、小さな女党に所属しています。代表と副代表、そして党员である私のたった3人の集団なのですが、もっと党员を増やして大きな組織にしたいんです」

3人「……」

川崎「というわけで、宣伝活動をやらせてもらえないでしょうか」

平野「……宣伝活動というのは、どういう……」

川崎「みなさんがコントライブをしている、その出し物と出し物の間の時間とかそれが終わった後に、演説をさせてもらう。もしくは、それが無理なら、前座の前座っていうか、始まる前に、演説をさせてもらう。もしくはそれが無理なら、会場の周辺で、演説をさせてもらう、ということでしょうか」

酒井「あの、演説って、どういうものなんですか」

川崎「小さな女党の主張を、党の代表である岡星が熱心に語ります」

酒井「ああ。なるほど」

平野「しかし、それは、やはり私たちの一存では」

川崎「ええ。ですので、ライブを主催されるかたに頼んでもらえないでしょうか」

平野「……わかりました」

川崎「どれも可能性がないときは、配布物だけでもいいから配らせてください」

平野「はい」

酒井「おい。それは工藤さんに確認したほうがいいよ」

平野「そうか……」

4人、それぞれ、飲み物を飲む。

川崎「では、宣伝活動ができるかどうか、メールかなにかで、お返事いただけますか」

平野「あ、はい」

4人、飲み物を飲む。

川崎「……じゃ、私は、これで」

平野「あ、それじゃ」

酒井「どうも」

新山「さようなら」

川崎、去る。

新山「なんだ、あの女。クソだな。小さな女教ってなんだよ。なんかの宗教か」

平野「教じゃない。党だ」  
新山「けっ、選挙にでも出る気か」  
酒井「こんなところで宣伝活動しても意味ないのに」  
新山「おまえ、工藤さんに話すのかよ」  
平野「話さない。おれから、この話は断っとく」  
新山「なにが、ファンだよ。浮かれやがって」

4

福島県立美術館。  
常設展で、熱心に版画を見ている男。やや、離れてその男を見ている岡星と小川。  
二人、男に近づく。

小川「清宮質文、九月の海辺」  
岡星「え、あれ、これ、この人、砂に埋まってるんですか」  
男「……ああ。どうでしょう」  
小川「あ、目か、これ。鯨の向こうの」  
男「……」  
小川「鯨ですよ。これ」  
男「さー。どうなんでしょうか」

岡星「あの、少し、お話聞いてもらってもいいですか」  
男「はい……」

3人、移動する。

小川「……版画、お好きなんですか」  
男「ええ。むしろ、こっちのほうが、企画展より感動してしまって」  
岡星「私たちも、そう思います」

小川「この人、とてもいいと思うわ」

岡星「そうね」

小川「私たちは、小さな女党です。こちらは、代表の岡星。私は、副代表の小川です」

岡星「私たちは、世界の上昇する気温を、小さな女の小さなパワーで冷ましたい。それは、どうすれば、実現できるのか。男社会のテンションを下げればいいんです。」



小川「男の大きさに抵抗できるのは、女の小ささです。で、あなたに頼みたいことがあります」

岡星「私たちと一緒に子供をつくってください」

男「え、そんな」

小川「代表と副代表。どっちでもいい。私たちには子供が必要です。子供ができれば、この運動は未来永劫、続きます。そして、その子供は世界を救うんです。」

岡星「イツ、スモールワールド。スモールフォーエバー」

美術館の管理スタッフが、来て、声をかける。

スタッフ「あの、ちょっと。すみません」

男、去る。

残される岡星と小川。

やがて、また、違う男が展示スペースに来る。

二人は、やや離れて、それを見る。

5

福島コント劇場内。

平野、新山、酒井が、「動物コント」を、工藤先輩と小柴先輩に見てもらっている。

オチにさしかかる。

新山「うー。うー」

平野「政府の犬め！」

酒井「いや、奴はオバマの犬、ポチ、ポチ」

新山「はい」

酒井「犬語で応えろよ」

平野「こいつ日本人だからな」

酒井「ポチポチポチ」

新山「ワンワンワン」

酒井「それって英語でも、ワンなのかな。」

新山「……ウわんスー」

酒井「わオ、それ英語っぽいだけだろ」

平野「舌をね、ああ、なるほど、歯と歯の間で。もっと、楽にいけないもんかな」

新山「豚！」

酒井「な、なんだよ」

新山「ふがふがふがふが。豚！」

酒井「豚ってだけ叫んだってわかんないよ」

平野「わー。豚さんだーかわいい。」

新山「ふが！」

と、平野、新山と自撮りする。

酒井「なるほど、ジドリか。豚を前にしてまで、マイペース。なんで？」

平野「ぼく、実は88年生まれなんです」

2人「うん？」

平野「ユトリです」

2人「もーいいわ」

3人「ありがとうございますー」

先輩の工藤・小柴、黙っている。

やがて。

小柴「ユトリって、なに」

平野「あ、えっと、ぼくら、88年生まれなんで、ユトリ世代ってことです。……そのユトリと動物の鳥を」

小柴「……そうか、なるほど」

工藤「ジャズを踊りのための音楽から、聴くための音楽にしたのはチャーリー・パーカーだ。おれはコント界のチャーリー・パーカーになりたい。……な、平野」

平野「はい」

工藤「コントは、どうしたらいい」

平野「……わかりません」

工藤「……コントは、客が笑うためのものから、客が見て、考えるものにしなくちゃ、いけないんじゃないか。……うん？ どうなんだよ」

3人「……」

工藤「おれたちの新作、見るか」

3人「うす」

工藤と小柴が、新作を3人に見せる。

工藤「コント、夜と夢。……あるコンサートホール。終演後の楽屋に指揮者が一人残っている。忘れ物を取りにコンサートマスターが戻って来る。……お疲れ様です」

小柴「お疲れ様でした」

工藤、楽譜を見つけて手に取る。

小柴「どうしたんですか？」

工藤「ちょっと忘れ物をしてしまいました」

小柴「ああ、次の楽譜ですね」

工藤「どうかされたんですか？」

小柴「いえ、別に。もう帰ります」

工藤「そうですか、では次の演奏会もよろしくお願いします」

小柴「すみません、昨日見た夢の話聞いてもらってもいいですか？」

工藤「どうぞ」

小柴「昨日疲れてて、仕事が終わって、午前三時くらいに家に着いて、食事をしようと椅子に座っていたらそのまま眠ってしまったんです」

工藤「そうですか。今回の曲は難しかったですね。でもマエストロのおかげでまとまりました。お客さんもすごい拍手で」

小柴「僕は夢の中でも机の前で寝ていて、その僕の頭に手が触れたんです」

工藤「ホラーですね」

小柴「いえ、怖いとかでは全然なくて、むしろ安心したんです。その手がゆっくり僕の頭を起こしました。で、グラスが口元に運ばれてきて」

工藤「毒ですか？」

小柴「いえ、毒ではありませんでした。何か、全身に染み渡るような」

工藤「ああ、風邪の時の卵酒みたいな」

小柴「うーん」

工藤「ポカリみたいな感じですか？」

小柴「ポカリの百倍、ですかね、強いて言えば。それから、ハンカチで額を拭かれました」

工藤「あー手術中みたいに」

小柴「いえ、何というか、身を清めるような」

工藤「ああ、汚れを取るみたいな」

小柴「まあそんなに僕、汚れてないですけど」

小柴、工藤の手を掴む。

小柴「で、手が伸びてきて僕の手をこう」

工藤「こうですか？」

小柴「いや、そういうのじゃなくて」

工藤「こう」

小柴「もっと柔らかかったです」

工藤「こう」

小柴「力の問題じゃないんですよね。全身が包み込まれるような。こう」

工藤と小柴、歌を口ずさむ。それは、シューベルトの「夜と夢」

工藤「……どうだった」

3人「……」

工藤「酒井。どうだった」

酒井「……難解でした」

工藤「そうか……新山は？」

新山「……確かに、考えさせられました」

工藤「そうか」

新山「でも、コントは、やっぱり、笑えたほうが」

工藤「……」

6

福島県庁前バス停。川崎がバスを待っている。バスが来る。

川崎、バスに乗る。動き出すバス。

小川が乗り込んで来る。

やがて、岡星が乗り込んで来る。

間隔を置いて、3人は座席に座っている。運転手と数人の乗客。

小川「7月の世界の平均気温が過去最高を記録しました。今年が、世界的にも最も暑い夏になることは、ほぼ確実です。世界の地表気温と海面水温の平均値は20世紀平均を1.75度上回ってます。今年が、もっとも暖かい年にならないためには、12月が寒い冬となって、世界の平均気温が、過去最低の1916年12月の記録をさらに0.43度下回ることです。これは、まず、ありえません」

岡星「それに対する、小さな女党の対応策は、明日13時半から〇〇公民館の会議室で、昼寝の抗議活動

をいたしましょう」

小川「私もおともいたします」

川崎「私もおともいたします」

小川「アメリカ、カリフォルニア州で2011年から続いている記録的な干ばつにより、5800万本ものセコイアをはじめとする巨木が脅威にさらされています」

岡星「水不足なんですね」

小川「はい」

岡星「では、今から、寝るまでのあいだ、私たちが水を飲まないで、セコイアの木のことを祈りましょう」

二人「はい」

バスは走る。

小川「川崎さん、なにか、報告はありますか」

川崎「検討中の案件でした宣伝活動の可能性ですが、残念ながら、先ほど、お断りの連絡がありました」

バスは走る。

岡星「二つの可能性がある。自分を無限に小さくしてゆくこと。それは、一つのはじまりであり、至上の行いである。それから、常に小さくあること。これは、人類の最終目標であり、虚無の極みである」

3人の女は窓の外を見ている。

7

数日後。夜。

阿武隈川の支流、荒川の河原。上を新幹線が通る。

数人の男が来る。新山、と工藤先輩と小柴先輩。やや遅れて、酒井が来て、遠くから3人を見ている。

新山、川を前にして逃げ場がない。

と、振り向いたところを、小柴に鉄パイプで殴られる。崩れ落ちる新山。

小柴はその後も何度も新山を殴る。そして、二人は去る。

酒井、動かなくなった新山の身体を見に近寄る。

また、新幹線が通る。

酒井もその場を立ち去る。

阿武隈川の川辺の道。

平野が立っている。川崎が来る。

平野「こんにちは」

川崎「こんにちは」

平野「よく来てくれました」

川崎「話があるって言うから、来ました」

平野「知りたかったのです。あのコントが面白かった理由を」

川崎「そう。私、行かなかったけど、ライブ」

平野「ええ。……その前に、窓越しに、聞いてくれていたから」

川崎「ああ、あれ。……そうか。でも、理由なんか、わからないわ」

二人、歩き出す。

平野「すみません。宣伝活動の協力ができなくて」

川崎「いいのよ。あんなこと。……私、あれ、やめたの」

平野「え。小さな女党ですか」

川崎「ある日突然これは駄目だって思って。それまでは、そんなこと全然思ってなかったのに」

平野「え。思ってなかったんですか」

川崎「思ったこと、なかった」

平野「ぼくもコントやめようかと」

川崎「あら、どうして」

平野「向いてないから、ですかね」

川崎「ほとんどの人がなにかを辞める理由は、それ。……向いてない。じゃ、向いてることってなんだろうか、それを探すのかこれから、でも、そんなのあるだろうか、ないかな、……ないってことはわかってて、ま、理由聞かれて応えるんだったら、本質的な根拠だし、向いてないって応えとこう、ってことでしょう」

平野「……」

川崎「だから、辞める理由なんて、言っても仕方がない。……あ、ごめんなさい、聞いといて」

平野「おれには、なんにも、自分に向いてるものないってことか」

川崎「あなたのことだけ、言ってるわけじゃないけど。かといって、私のことを言いたいわけじゃない。……、本当にこの世の中って、誰かとなにかがマッチするようになってるって思う？ ただ、今、うまく

いってるやつらのマッチ度が一人歩きしてるだけでしょ」

川崎「マッチ度って、なんですか」

平野「え。なにかとなにかのマッチする度合い。ぴたっと感」

平野「あの、階段上がって行くと、すわる場所があります」

丘を登り、二人、ベンチにすわる。

川崎「阿武隈川ね」

平野「ええ」

川崎「川は見えないけれど」

平野「音は聞こえる」

川崎「……平野くん」

平野「はい」

川崎「平野くんのことを話して」

平野「ああ。……今日は、バイトでした。昼は、ホテルの配膳係です」

川崎「それが終ってここに来るまで」

平野「……話す、というか、動いて見せましょう。ここは、中合の前です」

平野、綺麗な女性に目移りして、その女性を追いかけては、次の女性を、というふう動く。

平野「わかりますか」

川崎「わからない」

平野「すぐ好きな人ができるんです。街中を歩いている人がいます。綺麗だなんて思ったらついて行くんです。今日は、飯坂線のホームまで、つけました」

川崎「それ、あぶない人でしょ」

平野「わからないようにです。忍び足で。……あ、靴紐」

川崎「あ」

平野、川崎の靴紐を結ぶ。

川崎「ありがとう。……『追憶』って映画、知ってる？……学生運動に没頭する左翼の女学生バーブラ・ストライサンドとノンポリのプレイボーイのロバート・レッドフォードが出ている」

平野「いえ」

川崎「……境遇も思想も何もかも正反対の二人は、なぜか魅かれ会う。あるとき、ビールを飲んでるロバート・レッドフォードにバーブラ・ストライサンドは呼び止められる。話をしているうちに、彼女の靴紐

がほどけているの気づいて。ちょっと、待って、って言う。彼女はどうでもいいような話に、もう、これ以上展開はないって思って帰ろうとしていたの。そのとき、彼は、自分の膝の上に、彼女の足を置いて、靴紐を結んであげて、軽く、足先をさわる。どきっとして……私は、小川さんにも、同じようなことを、したいってずっと思ってた。小川さんの靴紐を結びたいのか、小川さんから、結んでもらいたいのかは、もうどっちでもいい」

平野「小川さんって、誰ですか。」

川崎「え、小川さん？」

平野「ええ、今、小川さんって言いましたよ」

川崎「……」

川の音。

川崎「あの、街で、一緒だった」

平野「ああ。副代表ですか」

川崎「ええ」

ジョギングをする人が来て、しばしの休憩のあと、  
パントマイムの練習をする。

平野「その気持ち、伝えたんですか」

川崎、首をふる。そして、泣く。

平野の電話が鳴る。どこかの路上にいる酒井から。

平野「はい」

酒井「新山が、荒川の河原で、工藤さんと小柴さんに鉄パイプで殴られた」

平野「え、なんで」

酒井「新山が、ライブの売り上げ金を盗んだと思ってるらしい」

平野「ほんとに、新山、そんなことしたのか」

酒井「わからん。したのかも」

平野「ええ！」

酒井「おまえも逃げたほうがいい」

平野「なんで」

酒井「まだ、お金が見つかってない。あいつ、おれとおまえが持ってるって言ったのかもしれない」

平野「なんでまた、そんなこと」



酒井「あ」

酒井、闇に消える。

川崎「どうかした？」

平野「いえ」

川崎、泣く。

平野、川崎の肩を抱く。

川崎「小川さんは、代表の岡星さんのことを愛しているの」

平野「大丈夫、大丈夫」

川崎「なにが大丈夫なの」

平野「え」

川崎「私、帰らなきゃ」

バス停へ走る、川崎。

後を追う、平野。

9

県庁前のバス停から、バスに乗る、二人。

運転手と数人の乗客。

平野「……おれが、伝えますよ。川崎さんの気持ち、小川さんに。川崎さんはあなたを愛してますって」

川崎「ありがとう。でも、もう、ほんとにいいから」

平野「はい」

川崎「平野くん、家、こっちなの」

平野「いえ。……そのことを、言いたくて」

バスは走る。

やがて、停留所で止まる。

川崎「私ここで降りるけど。平野くんは」

平野「あ、はい。大丈夫です」

川崎「じゃ」

川崎、降りる。

工藤と小柴が乗り込んで来る。

バスは走る。

平野とやや離れて後部座席に工藤と小柴はすわる。

気配に気づいて、平野は二人を見る。

また、停留所が来て、乗客が降りる。

やがて、3人になる。

バスは走る。

小柴「平野、おまえ、どこで降りるんだよ。……おまえの家、こっちだったか。……平野、おい平野」

平野「……」

小柴「なんだよ。応えろよ」

平野「……」

工藤「……あつつい」

工藤、エアコンの具合を探る。

バスは、走る。